モゴール語 moγolí, 英 Mogol, Moghol, 独 Mogholisch, 露 могольский язык, 中 莫戈勒(Mògēlè)

［概　説］　アフガニスタンのモゴール(moγól)族によって話される，モンゴル系の言語.

話者数は明らかでないが，多く見積もっても，数百人程度と推定される.

アラビア文字によって口語を記録した文献がいくつか伝えられているが，規範化された書き言葉はない.

モゴール族は，アフガニスタンの北西部に点在する少数民族で，その言語がモンゴル系であることから，13～14世紀のモンゴル帝国の時代のモンゴル駐屯兵の末裔であると，一般に考えられている．人種的には，チュルク系およびイラン系住民との混血が進んでいる．モゴール族は，イスラム教徒である.

モゴール族の居住地としては，アフガニスタン北西部のヘラート(Herat)州のカリズムッラ(Kariz Mulla)，クンドゥル(Kundur)，ベダウィ(Bedawi)，デフシェイク(Deh Sheikh)，ドゥルディ(Du Rudi)，ナウ(Nau)，ザマナバード(Zamanabad)，トルカバード(Torkabad)，マンゼル(Manzel)などの村，マイマナ(Maimana)州のカタカラ(Kata Qala)，ムルチャガール(Murchagar)，カタガーン(Qataghan)州のアブイコール(Ab-i-kol)，および，ゴラート(Ghorat)州のジルニ(Zirni)などの村々が報告されている.

モゴール族の人口について，ヴァイアース(M. Weiers, 1986)は，約3千人と推定している．この中で，モゴール語を話すのは，多くの場合，村の古老など，きわめて限られている．モゴール族は，日常語としてペルシア語，もしくは，パシュトー語（マイマナ州のモゴール族)を使用している.

アフガニスタン国内におけるモゴール族の分布と人口については，現在に至るまで網羅的な調査は行なわれておらず，詳細は不明である．特に，1970年代の後半から10年以上続いた内戦の結果，その後のモゴール族の実態を捉えることは，きわめて困難である．

[研究史] 19世紀前半，イギリスの軍人リーチ(R. Leech)は，インドの西方に位置するいくつかの民族の言語見本を蒐集して，1838年にインドで出版したが，それには，モゴール語の単語約200と短文29が収められていた．このモゴール語の資料は，ドイツの言語学者ガーベレンツ(H. C. von der Gabelentz, 1866)によって，西欧の学界に紹介された．

その後，フィンランドのアルタイ学者ラムステット(G. J. Ramstedt)は，ガーベレンツが由来不明としているモゴール語の単語が，古いモンゴル語に由来していることを見極め，アフガニスタンにモゴール族の後裔がいることを確信して，ロシア側から探索旅行を行なった．ラムステットは，1903年に，アフガニスタン国境に近いクシカ(Kuška)の町で，アフガニスタンから出稼ぎに来ていたモゴール族の青年兄弟2人を捜し当て，口語資料を採集した．調査は，ラムステットがマラリヤに罹ったため，急遽中断されたが，そのときの記録は，1905年に，"Mogholica"として出版された．これは，約900の単語と270の短文，6篇の短話に，音論と形態論が付された論文で，モゴール語に関する最初の科学的な記述となった．しかし，アフガニスタンにおけるモゴール族に関しては，その後も，半世紀にわたって調査が及ばず，実態は不明のままであった(1936～37年に，リゲティ L. Ligeti をはじめとするハンガリーの調査隊が，モゴール族の調査を行なったが，その資料は，一部を除いて公刊されていない)．

1954年に，アフガニスタンで，モゴール族の集落の所在をつきとめたのは，岩村忍をはじめとする日本の京都大学探検隊である．探検隊は，翌1955年に，モゴール語を記録し，また，ペルシア語とモゴール語の対訳語彙集の2写本を入手した．写本とその研究は，*The Zirni Manuscript* (1961)として公刊されたが，口語の記録は，未公刊のままである．

1969～71年には，西ドイツ，ボン大学の調査隊が，ヘラート州でモゴール族の調査を行ない，口語を記録し，モゴール語の韻文や語彙集の写本を発見した．その成果は，ヴァイアース(M. Weiers 1969, 1970, 1972a, 1972b, 1975, 1977)，ハイシヒ(W. Heissig, 1974)らによって公刊されている．とくにヴァイアース(1972b)は，短文900以上，単語約1,140，音論，形態論，統語論を含み，モゴール語のもっとも詳しい概説となっている．

アフガニスタン本国では，ホーマン(S. Homan)が現地調査を行ない，モゴール語の韻文や物語を採録したと，学会で報告している．

[言語特徴] モゴール語は，モンゴル諸語の中で，孤立的な位置に立つ言語として分類される．これは，モゴール語が，13～14世紀に他のモンゴル諸語と分かれてのち，長期間にわたって互いに接触をもたず，独自の発展を遂げたことによると考えられる．

モゴール語の目立った特徴としては，何よりもまず，ペルシア語から強い影響を受けていることを指摘することができる．ラムステット(1905)やヴァイアース(1972b)の記録した語彙のうち，すでに過半は，ペルシア語などの外来の要素によって占められており，このため，音声面でも，喉音の ʔ, h, γ [ʁ] など，新たにいくつかの音韻も生じている．また，文構成においても，ペルシア語の接続詞や関係代名詞を用いた従属文の構造を受け入れるなど，その影響はきわめて大きい．

他方，文法形態の基本的な枠組みと要素(接尾辞)では，モンゴル語的な特徴を継承しているということができる．語彙や接尾辞のうちには，他のモンゴル諸語で失われた，古風な特徴も見いだされる．

[音 韻] モゴール語における音声面での目立った特徴を列挙すれば，次のとおりである．

1) 母音調和がない．

2) 語のアクセントの位置は，語末音節の母音にあることが多いが，他の音節にあることもある．

3) 後舌円唇母音音素 u, o に対する，前舌円唇母音音素がない．

4) 中世モンゴル語の語頭の無声摩擦音 h に対応する子音をもたない．

中世モンゴル語	モゴール語
heligen「肝臓」	ilkán「心臓」
hula'an「赤い」	ulám「赤い」
hünesü「灰」	unasún「灰」

5) 中世モンゴル語の母音連続(hiatus)に対応して，二重母音が現われることがある．

中世モンゴル語	モゴール語
a'ula「山」	auló「山」
sa'u-「座る」	sau-「座る」
e'üden「門」	oidan「扉」

6) モンゴル文語の子音 q, k に対して，無声閉鎖音の q, k が現われる．

モンゴル語文語	モゴール語
qara「黒い」	qarói「黒い」
noqai「犬」	noqai「犬」
köke「青い」	koká ～ kokó「青い」
keüken「子供；娘」	kauká「子供」

母音は，i, e, a, o, u の5つの音素からなる．i と u は，IPA (1979年版，以下同じ) の [i] [u] に近いが，e, a, o の代表的な音価は，IPA で，それぞれ e [ɛ], a [ʌ], o [ɔ ～ o] である．

ená [ɛná]「これ；この」，amrá [ʌmrá]「友達」，qoló [qɔló]「遠い」

ラムステット(1905)は，それぞれの母音に対応する長母音を表記しているが，アクセントは表記していない．一方，ヴァイアース(1972b)では，アクセントを表記して，長母音を認めていない．以下では，ヴァイアースの表記に従った．

二重母音には，下降二重母音の ai, ei, oi, ui, au, ou と，上昇二重母音の aí, oí, uí, io, uo, ua, oa などがある．

子音には，b, d, dž, g; p, t, tš, k, q, ʔ; f, s, š, x, h; w, z, j, γ; m, n, ŋ; l, r の24の音素がある．dž, tš, š は，IPA では [dʒ] [tʃ] [ʃ]，また，γ は，口蓋垂有声摩擦音の [ʁ] である．

子音のうち，f, h, ʔ, w, z は，ペルシア語からの借用語を介して用いられるようになった音である．

アクセントは，高さ(ピッチ)アクセントである．語中におけるアクセント位置は，固定的でないが，一般的な傾向として，語末，もしくは，語幹末におかれることが多い．

なお，モゴール語には，母音調和はない．

[形　態]　モゴール語では，他のモンゴル諸語と同様に，造語的，文法的な語形変化は，基本となる語幹にさまざまな接尾辞が付着することによって実現される．

文法的な語形変化は，名詞類の曲用と，動詞類の活用に大別される．

曲用には，1）複数，2）格，3）所属，の3種類がある．

1）複数を表わす語尾は，次のとおりである．

a）-d/-t : temón「ラクダ」—temó-d

b）-núd : askár「兵士」—askar-núd

c）-s/-z : zaifá「女」—zaifá-s

複数語尾は，「2」以上の数詞や，指示形容詞複数形などに修飾された名詞に付くことがある(例：qijar nafar-núd「2人の人」)が，これらの語句に修飾された名詞であっても，複数語尾が付かないことも多い(例：durbón temón「4頭のラクダ」)．

2）格の種類とそれらの代表的な語尾は，次のとおりである．

子音 n で終わる名詞の中には，主格形で，語末の n が脱落するものがある(表1の最上段を参照)．

3）所属には，a）再帰所属と，b）人称所属の2種類があり，それぞれ，次の語尾によって表わされる．

〈表 1〉 格の種類と代表的な語尾

種　類	語　尾	例 (morín ～ morí「馬」)
主　格	-φ (ゼロ)	morín ～ morí「馬が」
属・対格	-í/-éi	moriní「馬の；馬を」
与・位格	-dú/-tú	morindú「馬に」
奪　格	-asá/-asé	morinasá「馬から」
造　格	-ár/-ŋár	morinár「馬で」
連帯格	-lá	morinlá「馬と」

a）再帰所属語尾 -a/-na/-ja は，名詞の斜格形に付き，それが文の主語に所属することを表わす．多くは，「自分の」と訳せば当たる．

džai「場所」— džai-du「場所に」— džai-du-na「自分の場所に」

b）人称所属は，「私の」「君の」などの所有の意味を，語尾によって表わすもので，人称と数によって，次の種類がある．カッコ内は，任意要素である．3人称には，数の区別はない．

	単　数	複　数
1人称	-mini/-(m)ni	-moni/-ma(ni)
2人称	-tšini/-tš(i)	-toni
3人称	-(i)ni/-i	

代名詞の曲用変化は，基本的には，上述の名詞の曲用に等しいが，一部，語幹の交替がみられる．

人称代名詞の格変化形は，次のとおりである．

〈表 2〉 人称代名詞の格変化形

1・単	2・単	1・複	2・複
主　格			
bi	tši	bidad	to
属・対格			
nam-í	tšin-í	bidan-í	ton-í
与・位格			
nan-dú	tšinan-dú	bidan-dú	ton-dú
奪　格			
nama-sá	tšina-sá	bidan-asá	ton-asá
造　格			
nama-ŋár	tšina-ŋár	bidan-ár	ton-ár

3人称の人称代名詞には，次の指示代名詞が代用される．

	単　数	複　数
近称	ená「これ；この」	enád「これら；これらの」
遠称	té「あれ；あの」	téd「あれら；あれらの」

基本数詞では，niká ～ nikán「1」，qijár「2」，qurbán「3」，durbón「4」，tabán ～ tabón「5」までがモゴール系の単語で，「6」以上は，ペルシア語からの借用語を用いている．

モゴール語には，文の述語となる動詞活用形（主に

叙述類）に付いて，人称と数を表わす次のような人称語尾がある．述語人称語尾に，アクセントはない．

	単　数	複　数
1人称	-bi	-da/-bda
2人称	-tši	-to(d)
3人称	ゼロ	(-nud)

上の語尾のうち，1人称複数の -bda は，母音で終わる語に付く形である．また，カッコ内は，任意要素である．

動詞の活用は，1）命令・願望類，2）叙述類，3）形動詞類，4）副動詞類，に分けられる．

1）命令・願望類の種類と語尾は，次のとおりである．

種　類	語　尾	例（íra-「来る」）
命令形	-φ(ゼロ)	íra「来い」
依頼形	-tu(d)/-to(d)	íra-tu(d)「来てください」
意志形	-su	íra-su「来よう」
勧誘形	-ja	íra-ja「いっしょに来よう」
容認形	-ga/-ka/-γa	íra-ga「来るにまかせよ」

命令形と依頼形は2人称の主語に対応し，意志形は1人称単数の主語に，勧誘形は1人称単数・複数の主語に，また，容認形は3人称の主語に，それぞれ呼応する．また，依頼形の末尾の子音 -d は，複数の主語に呼応する．

命令・願望類の活用形の前に禁止の副詞 bí をおいて，禁止を表わす．

kelé「話せ」—bíkele「話すな」

idaja「食べよう」—bídaja「食べずにいよう」

2）叙述類の種類と語尾は，次のとおりである．叙述類の動詞活用形には，述語人称語尾（前述）が付く（カッコ内は，任意の要素であることを表わす）．

《現在・未来形Ⅰ》

1人称　-(na)m＋人称語尾

2人称　-(na)n＋人称語尾

3人称　-na/-ne（＋人称語尾）

《現在・未来形Ⅱ》　-m（3人称のみ）

（注：現在・未来形Ⅰ，Ⅱの語尾が子音で終わる動詞語幹に付くとき，語尾との間に，つなぎの母音 -ú- が挿入される）

《過去形Ⅰ》　1人称　-bú/-pú＋人称語尾

2人称　-bá/-pá＋人称語尾

3人称　-bá/-pá（＋人称語尾）

（注：p で始まる形は，子音で終わる動詞語幹に付く）

《過去形Ⅱ》　1人称　-lá(m)＋人称語尾

2人称　-lá(n)＋人称語尾

3人称　-lá

《過去形Ⅲ》　1人称　-džám＋人称語尾

2人称　-džán＋人称語尾

3人称　-džá

叙述類の否定には，活用形の前に，打ち消しの副詞 ulá または esá/isá をおく．ulá は現在形と，esá/isá は，過去形とともに用いられる．後続する語の語頭の母音と融合して，ulá は，léi-, ló-, lé-, lú- などの形になり，また，esá/isá は，sá-, só-, sé-, sú- などの形になることがある．

ulá tšida-nambi.「(私には)できない」

orpá lé-ida-nambi.「(私は)大麦パンを食べない」

té isá meda-ba.「彼は理解しなかった」

motár sé-ira-ba.「自動車は来なかった」

また，「～がない」「～でない」に当たる表現には，ugéibi/géibi/géibe を用いる．

ená ukín géibe.「彼女は(もう)娘ではない」

altó-mini géibi.「私には金がない」

3）形動詞類の種類と語尾は，次のとおりである．

種　類	語　尾	意　味
完　了	-xsán	「～した…」
予　定	-ku(i)/-qui	「～する…」
行為主	-qtši/-ktši/-xtši	「～する(人，者)」

4）副動詞類の種類は少なく，よく用いられる語尾は，次のものだけである．

並列形：-tši/-dži「～し(て)，…」

動詞の態（voice）は，動詞語幹に，次のような接尾辞が付くことによって表わされる．

1）受動態：-gda-/-kda-

udža-「見る」—udža-gda-「見られる」

2）使役態：-ga-/ -γa-, -lγa-

guí-「走る」—gui-lγá-「走らせる」

語順では，主語–目的語–述語動詞（SOV）が原則である．モゴール語では，次のように，ペルシア語の接続詞および関係代名詞 ki/ke を用いて，従属節を後続させる構文が発達しているが，これは，他のモンゴル諸語にはみられない独自の現象である．

té　ga-bá ke ená　ukí-mni　bol-ú-m.

彼は　言った ← これは　娘(私の)　です

「『これは私の娘です』と，彼は言った」

musulmán ke uku-bá　džana-tu　úrtši-na.

回教徒　← 死んだ　天国に　行く

「死んだ回教徒は天国に行く」

bí　mona-dú　džaláu　ulá-udža-nambi　ke

私は　ここで　若者を　(否定)見る　←

edžán　ki-su.

夫に　しよう

「私はここで夫にしたいような若者を見かけない」

[参考文献]

Gabelenz, H.C. von der (1866), "Über die Sprache der Hazâras und Aimaks", *Zeitschrift der Deutsch-Morgenländischen Gesellschaft* B XX (Wiesbaden)

Heissig, W. (1974), *Schriftliche Quellen in Moġolī*, 1. Teil: *Texte in Faksimile* (Westdeutscher, Opladen)

Homan, S. (1973), "Afghan Moghols", *Олон улсын монголч эрдэмтний II их хурал*, II боть (Улаанбаатар)

——— (1984), "Moghol poets and storytellers", *Олон улсын монголч эрдэмтний IV их хурал*, II боть (Улаанбаатар)

Iwamura, Sh. 〔岩村忍〕 and H. F. Schurmann (1954), "Notes on Mongolian Groups in Afghanistan", *Silver Jubilee Volume of the Zinbun-Kagaku-Kenkyusho, Kyoto University* (Kyoto)

Iwamura, Sh. (with the collaboration of N. Osada and the late T. Yamasaki) (1961), *The Zirni Manuscript. A Persian-Mongolian Glossary and Grammar* (Kyoto)

Ligeti, L. (1954a), "Recherches sur les dialectes mongols et turcs de l'Afghanistan", *Acta Orientalia*(B) 4 (Budapest)

——— (1954b), "Le lexique moghol de R. Leech", *Acta Orientalia*(B) 4

Pritsak, O. (1964), "Das mogholische", *Handbuch der Orientalistik*, I. Abt., V. Band, II. Abschnitt: *Mongolistik* (E. J. Brill, Leiden/Köln)

Ramstedt, G. J. (1905), "Mogholica. Beiträge zur kenntnis der moghol-sprache in Afghanistan", *Journal de la Société Finno-ougrienne* 23(4) (Helsingfors)

Weiers, M. (1969), "Vorläufiger Bericht über sprachwissenschaftliche Aufnahmen bei den Moghol von Afghanistan, 1969", *Zentralasiatische Studien* 〔以下, *ZAS*〕 3 (Bonn)

——— (1970), "Weiterer Bericht über sprachwissenschaftliche Aufnahmen bei den Moghol von Afghanistan, 1970", *ZAS* 4

——— (1972a), "Bericht über weitere Arbeiten bei den Moghol von Afghanistan, 1971", *ZAS* 6

——— (1972b), *Die Sprache der Moghol der Provinz Herat in Afghanistan* (*Sprachmaterial, Grammatik, Wortliste*) (Westdeutscher, Opladen)

——— (1975), *Schriftliche Quellen in Moġolī*, 2. Teil: *Bearbeitung der Texte* (Westdeutscher, Opladen)

——— (1977), *Schriftliche Quellen in Moġolī*, 3. Teil: *Poesie der Mogholen* (Westdeutscher, Opladen)

——— (1986), "Zur Herausbildung und Entwicklung mongolischer Sprachen. Ein Überblick", *Die Mongolien: Beiträge zu ihrer Geschichte und Kultur* (Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt)

布和 (1987),「阿富汗莫戈勒語語音学——兼述莫戈勒語研究概況」『内蒙古大学学報, 哲学社会科学蒙文版』第3期 (呼和浩特)

——— (1990),「莫戈勒語中的蒙古語族同源詞」(之一, 之二, 之三)『内蒙古大学学報, 哲学社会科学版』第1期, 第2期, 第3期 (呼和浩特)

[参　照]　モンゴル諸語

(栗林　均)